えたのであろう。現存しない。

6　別に又、寒食散、解散と呼ぶ。五石は紫石英、白石英、赤石脂、鐘乳、石硫黄を言うか。孫子邈による適用量が『千金方』巻二四に出る。

7　『千金翼方』巻一五大補養第二張仲景紫石寒食散治傷寒已愈不復方に載せる。『金匱要略』雑療法第二三に見えるのと酷似する。

8　『医家千字文』（一二九三）に「泰山鐘乳、蜀江金牙」と言うのは『新修本草』（六五九）に拠ったものであろうか。狩谷掖斎（一七七五―一八三五）は上質品の産地を備中国英賀郡とし、貞観元年（八五九）二月二日に備中国で採取のあったことを記す（『箋注和名類聚抄』）。

9　『全唐詩』（一七〇七）第一函第七冊に孫思邈の錬金の四言詩を載せる。

10　『医心方』巻一九服紅雪方第一七に引用する。『隋書』経籍志に出る。

〔付記〕

1　図書寮叢刊『新修本草残巻』（昭五八）巻第一四の訶梨勒の条「水磨或散水」は「水摩或散」で散下の水は衍、水剤、膏剤、散剤の義である。

2　拙著『唐招提寺鑑真和上秘方薬（茶）をめぐって』和漢薬一八六　昭四三

（帝塚山学院大学）

『医心方』の伝写について（Ⅳ）

愛知県下にある『医心方』写本

杉立義一

愛知県下には次の二種の『医心方』写本がある。

一、蓬左文庫所蔵の写本廿巻廿冊

これに「医心方目録」がついている。

陵居	第一巻	夫黄	第二巻
治髪	第四巻	治水	第五巻
治胷	第六巻	治陰	第七巻
汁服	第八巻	去腫	第十巻
治卒	第十四巻	苾消	第十七巻
治服	第廿巻	婦人	第廿二巻
産婦	第廿三巻	治利	第廿五巻
馬勃		養性	
引於		治小	
薬多		脣熱	

右総計二十冊

これを安政本（三十巻）・内閣文庫所蔵本（二十巻二十冊）・杉立架蔵本（十九巻二十冊）と比較検討すると、次の三巻の巻名が間違っていることがわかった。即ち汁服は巻十・去腫は巻廿・治利は巻十一が正しい。また巻名の明記してないものは、馬勃は巻廿の末部であり、養性は巻廿七、引於は巻九、治小は巻廿五、薬多は巻十九、脣熱は巻廿九に相当する。

次に馬勃の巻（巻廿）の末尾には跋文がついている。これは寛政三年冬十一月に丹波（多紀）元悳が誌したものであるが、要旨は仁和王府室に伝蔵された『医心方』を幕府に取寄せて、筆写することができた。総数廿二包のうち、巻名の明らかなのは十巻のみで、他は巻名もなく区々であったが、これらを整理して十七冊とした。これに多紀家旧蔵の巻二・四・廿一・廿二を加えて廿一としたという趣旨である。

寛政三年十一月、丹波（多紀）元悳が校勘して、その息の安長元簡・安道元倹・宗粛元方と門人の三好元栗長秀が仁和寺本を筆写した。これを幕府に献上したが、その節に下写した一部を元悳が拝領して家に蔵した（富士川游著医史叢談・律修道蔵書目録による）。献上本は紅葉山文庫に所蔵されていたが、現在は内閣文庫にある。律修堂旧蔵本は現在所在不明である。大東急文庫旧蔵本は、多紀家より借りうけて、文政三年に伊沢蘭軒が友人島武に筆写させたものであり、杉立架蔵本は、多紀本を文政十三年に森川免毛が筆写したものである。

内閣文庫本の跋文をみると、蓬左文庫本とはその語句の配列・表現等に若干の差異はあるが、巻数・頁数等は殆ど同じであるが、多紀家旧蔵零本が、二・八・廿二の三巻となっている。

内閣文庫本・杉立架蔵本は跋本も巻廿二の妊婦図も蓬左文庫本と全く同じである。従ってこれらの点から考えて、蓬左文庫本は、多紀家所蔵本を筆写したものと思う。その年代・写手は不明である。

また蓬左文庫には、『医心方』写本ではないが、横山春造が文政三年に識した『医心方大意』がある。これは『医心方』三十巻の序論を意図したものである。

二、刈谷図書館村上文庫所蔵本、廿巻廿二冊

これは巻五が上・中・下の三冊に分けてあるために廿二

冊となっているが、すべて蓬左本と同じである。さらに同文庫には『医心方抄』一冊がある。これは廿巻の抄録で全一冊である。村上文庫創立者の刈谷藩医村上承卿が、天保十一年三月に筆写したものであり、これから考えて『医心方』廿巻も、その同年頃に村上承卿が筆写させたものと思う。

三、西尾市立図書館岩瀬文庫内にある半井家蔵書目録のなかに、『医心方』廿巻の他に、『医心方』の古写本五冊があったことが記してある。これは承安二年（一一七二）四月七日に書写し、文治五年（一一八九）十一月十日に文書博士敦光朝臣本を以て点訓したと記してある。しかしこれは記録のみで、現本は存在しない。

（京都市）

中国医学と道教（Ⅳ　善書について）

吉　元　昭　治

演者は本学会総会において、中国医学と道教との関係につき発表してきた。道教が、殊に明末清初の頃より儒教、仏教と混淆し、三教合一のかたちとなり、今日では民間信仰のかたちをとって、台湾および東南アジア華僑社会に生き、彼等の日常生活の指針ともなっている。一方、道教医学は、中国伝統医学をその側面とし、巫術的な面を残しながら、現在では民間療法の姿となって、民間信仰の具現性に力をかしている。

今回は前回の薬籤につづいて、善書をとりあげてみたい。

善書とは、酒井忠夫氏によれば、「善書とは観善の書という意味で、宋代以後一般に用いられた。観善を説く書であるから、販売のために刊行されるものではなく、無償で人に施与されることが多かった。この観善とは単に儒教の